

つながっているということを伝える



		富永 是親 仙台白百合学園中学・高等学校 数学	
教科	中学2年 SP タイム (総合的な学習の時間) 1時間 中学3年 SP タイム (総合的な学習の時間) 1時間 中学3年社会 1時間	対象	中学2年 SP タイム (総合的な学習の時間) 105名 中学3年 SP タイム (総合的な学習の時間) 91名 中学3年社会 30名

I 実践の目的

平成24年度という年は、本学園にとっては特別な年度であったといえる。その訳は、震災のあった2011年の9月に届けられたポーランドからの手紙から始まった生徒間交流が実現したからである。以前より韓国・フィリピンとの国際交流事業は行われており、生徒の国際教育に対する関心は強いといえるが、震災が縁となり実現したこの交流は、特に私達に地球の裏側から国境を越えた強い絆を実感させるものとなった。ポーランドからの生徒の滞在期間は学園中が盛りあがった。

その様な中、実は日本にむけて発信していた国が実はもっと数多くあるのだということを生徒に伝える必要があるのではないかと私は考えていたのである。

前年度の平成23年度の JICA 東北教師海外研修に参加した平岡静香先生の話を通して、インドネシアもその国の一つであるということを知り、日本に手を差し伸べてくれた国の具体例として生徒に紹介できるのではないかと考えた。(これは私の研修に参加する動機の一つでもあった。)

更に、どうしてインドネシアなのかということについても私は強調すべきだと考えた。インドネシアの人々、特にバンダアチェからは彼らが経験した地震をふまえてのメッセージがあったということ。そして、我々が住む宮城県とも密接な関係が築かれつつあるということにも触れることによって、強く結ばれていることをまずは知ってもらうことを第1の目的とした。

今回は、私が所属する学年を越えて、2つの学年全員を対象に授業をすることが出来、さらに平岡先生には中学3年の社会の1時間を使わせて頂き、一部の生徒だけではあるが、2回の授業をすることができた。2回目の授業は支援だけではなく、文化的な側面からも興味を持ってもらえればと、少しの言葉についても紹介した。

II 授業の構成

今回の実践は、事前授業は一切行わず、すべて事後授業となっている。

実践授業 第1回	中学2年 総合的な学習の時間	海外研修報告1 パワーポイントによる授業
実践授業 第2回	中学3年 総合的な学習の時間	海外研修報告1 (第1回と内容は同じ) パワーポイントによる授業

実践授業 第3回	中学社会（チームティーチング）	海外研修報告2 パワーポイントによる授業 インドネシアの言語
その他	宗教教師勉強会で発表 学校の図書館便りに掲載	海外研修報告3 パワーポイントによる発表・検討

Ⅲ 授業の詳細

(1) 実践授業 第1回, 第2回 (45分)

授業のタイミングとしては完全に学年の総合的な学習の時間の中に突如設定された形であったので、授業前の生徒の予備知識は皆無の状態での授業となった。しかも45分という限られた時間の中でもあったので、基礎データから始まり、画像を提示しながら生徒に質問を投げかけていく形式をとった。

スライド1

基礎データで知識の確認。生徒によって反応は様々だが、インドネシアが日本の5倍の面積を誇るという事は以外だったようである。

首都については、某アイドルグループのファンの生徒が思い切りよく答えてくれた。宗教については、イスラム教よりも先にヒンズー教、キリスト教（学校の性質上か？）という声が上がったが、イスラム教が出たのは最後の方であった。

インドネシアってどんな国？

- 面積？ 約189万平方キロメートル
- 人口？ 約2億3800万人
- 首都？ JAKARTA
- 言語？ インドネシア語
- 宗教？
 - イスラム教 88.1%
 - キリスト教 9.3%
(カトリック3.2%, プロテスタント6.1%)
 - ヒンズー教 1.8%
 - 仏教 0.6%

スライド2

地図を用いてインドネシアの場所を確認。

最初は世界地図からインドネシアを探し、次はインドネシアからバンダ・アチェの場所を予想してもらった。予想はしていたが、バンダアチェがどこにあるのか自信をもって答えられる生徒はいなかった。矢印で示してはじめて「え〜？」という声が出る。私も最初は知らなかったことを生徒に伝えた。

1. インドネシアはどこ？



スライド3

地図で確認すると、生徒からどうしてそのようなインドネシアの端にいったのかという声が出たので、このスライドを提示。

震災時に、この地から日本へむけてメッセージが送られてきたということ。

更には、直近の出来事で、東松島市がバンダアチェと交流を持っていることを紹介した。

生徒の中には、東松島市出身の生徒がおり、最後に感想を書いてもらったのであるが、自ら東松島市民であることを書いてきてくれた。

アチェとのことは初めて知ったということであったが、授業後に直接話に来てくれたのは授業者としては大変嬉しいものであった。

スライド4・5

津波犠牲者集団墓地の写真を提示。生徒には、墓地とは言わずに何が書いてあるかを予想するよう問いかけた。流石に英語はわかるので、日付はすぐに判明した。

何も言わずに次の写真を見せて、写真を前に戻したり…ということをしていると、生徒は最初の写真の数字の示すものについて考え出したようであった。

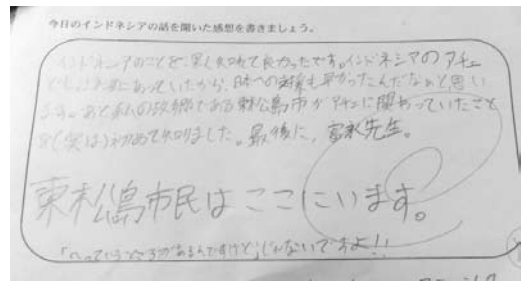
暫くして私が答を言うと、「やっぱりね」という言葉がでる。そして次の瞬間には教室が静まりかえってしまった。それまでは、私のインドネシア旅行記的な雰囲気では賑やかだっただけに、明らかに生徒達の私が何を報告せんとしているかの認識が変わった瞬間を感じた。この写真に合わせて、現地の人々の津波の捉え方について私が知る限りのこと（内戦を終わらせてくれたということ、神様からもたらされたものであるということ）を伝えると生徒は皆驚いていた。

Q.ところで…
どうしてバンダアチェ？

- 東日本大震災時、日本に寄せ書きがアチェから送られてきた。
- 募金活動、追悼行事が行われ、義援金等も日本に届けられた。

～最近の出来事～

- 2012年11月 東松島市がアチェ市との協力を深めるために調査団を派遣している。



スライド6・7

この写真を使って、マングローブとエビ（udang）の養殖の説明を簡単に行った。

2. 現地の産業について

- エビ(udang)の養殖が盛ん!

- エビは魚と比べると養殖するには時間も短く、利益を出しやすい。
- 利益をより上げるために、マングローブ林を伐採している。
- 但し、マングローブ林で育てるエビもある。

この話題に触れたのは、私がエビ嫌いであり、生徒達の多くがそれを知っていた為である。

スライド 8

学校訪問について、SMP というものが中学校を意味するということ。そして、なぜこの学校を訪問するのかという動機についても生徒に問いかけながら進めた。

各学校訪問毎に手厚い歓迎を受け、現地の生徒が日本語の曲で迎えてくれたことを伝えた。その中でも「心の友」という曲がバンダアチェでは国家に次いで広く知られていることを実際の曲を聴かせて説明するも、実際その曲を生徒が全く知らないということで、反応としては少し戸惑っている様子であった。

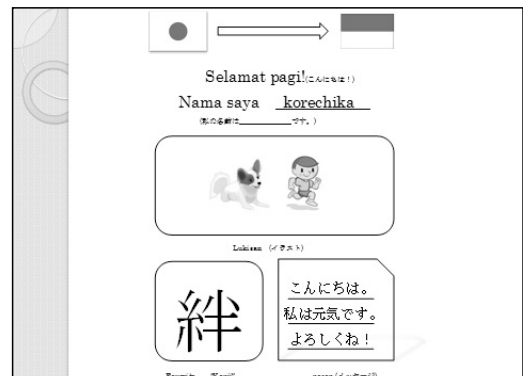


スライド 9

これは、渡航前に生徒にそれぞれメッセージをいかしてもらった見本シートである。前年度派遣の徳能克也先生のを大いに参考にさせて頂いた。

これを SMP11 で生徒に配布したときの様子を写真を交えて話すと、私のクラスの生徒だけではあったが、大変嬉しそうにしていた。

『あ！私の漢字があったよ！』という声が飛び交った。



※一番下のものが再生ボタンになっている。パワーポイントのハイパーリンクを使用。

スライド10・11

メッセージを渡す様子・生徒達が説明を受ける様子
現地の生徒達の様子を紹介。彼らが知っている日本語をここぞとばかりに使用してきたことを話した。この時の生徒とのやりとりはこうである。

富永：現地の生徒が私にこう言ってきました。

“しね おめでとうございます。”

さて、なんと言いたかったのでしょうか？

生徒：????

富永：どんな表情で言ったかと言うと、ニコニコしながら言ってきました。

生徒：(笑いがおきる)

富永：ヒントは年末年始です。



通訳のアルマンさんに説明を受ける生徒達

生徒：ああ～…。(納得した様子)
 富永：みんなわかったね！
 そう、答えは
 “新年明けましておめでとう”
 でした。

富永：彼らは、とにかく知っている言葉を私に投げかけてきました。もちろん私はインドネシア語を話せませんから、単語だけのやりとりになりました。ただ、彼らはそこで終わらなかったのです。インドネシア語が駄目ならば、知っている英語で可能な限り話しかけてくる。それでもだめならばボディーランゲージまで使ってくる子もいました。

私は、このエピソードを通して生徒達に、インドネシアの子たちが私に必死にコミュニケーションを取ろうと向かってくる姿勢には凄まじいものがあり、圧倒されてしまったことを伝えた。

「メッセージカードに書かれた漢字には何と書かれてあるのか？」「短い文章の意味は？」

純粋に新しいものを知ろうとする姿は日本の生徒達にも刺激になったのではないだろうか。

スライド12～17

被災女性による起業グループの方々が、津波の被害に遭ってから、どのような思いで今に至ったのかということを生徒達に話した。

そして、その近所には家屋に乗り上げた船が存在しているということに触れた。生徒達には現地の人々がこの船に対してどのような思いを抱いているだろうかと質問をなげかけた。(特に答えを聞いたりはしなかった。)

エスケープビルディングについて、この建物が日本の支援によって建てられたということ。そして、私の個人的な見方になってしまうが、人々が日本に対してしっかりと感謝の気持ちを持っているのと同時に、共に頑張ろうという意思が伝わってきたということを伝えた。

更に、日本へのメッセージを紹介した。



必死に読解を試みる生徒達



集合写真



- ①何事にも強い気持ちを持つことが大切です。まずは、結果（お金）ありきではなく、とにかく一生懸命やるということが大切なのです。
- ②内戦にせよ津波にせよ、先（未来）にあるものがあるからこそ、起きているのです。



スライド18

津波8周年記念式典について。

アチェ州知事をはじめ、多くの市民が参加した式典であるということを紹介。知事からは、防災への意識を高める必要があるという呼びかけの他、私達日本からの訪問を歓迎し、インドネシア、日本の二国間の協力関係を深めていきたいという話があったということをお話した。その後、宗教指導者と共に祈りを捧げた時の雰囲気を感じ取ってもらおうと、音声データを流した。



スライド19

最後に、フェアウェルパーティーの様子について。私がどのような格好でパーティーに臨み、どのようなことをしてきたのかということを紹介。

現地でコーディネーターを務めて下さった Mex さんから頂いたDVDを生徒達に見てもらった。

伝統的な舞踊は静かに見ていたようであったが、近代的なもの（AKB48）が始まると、意外だといわん



ばかりの様子が見られた。が、直ぐに笑いへと変わっていった。

生徒の授業の感想（一部紹介）

- ①先生のダンスが面白かった。そして、日本の漢字に興味を持ってくれたことが嬉しかった。
- ②津波によって内戦が治まったと解釈していたことにすごく驚きました。多くの人が亡くなっているのにどうしてそう思えるのかがとても不思議でした。
- ③8年前の2004年に起きた大きな地震を経験したインドネシアの方々について最近起きた東日本大震災で自分達日本人とインドネシア人の絆が大きく結ばれたと思いました。インドネシアにも大きな傷跡が残されていて、宮城にもたくさんの傷跡がありとても共感できた気がします。
- ④今日は先生が現地の服装でお話をして下さり、インドネシアに行ったような気分になりました。私は私達が書いた手紙を同い年の友達が興味をもって読んでくれたと聞いて嬉しかったです。私も今後さらに世界中の人々と交流を持ちたいと思います。そして国境を越えて活躍できる人になりたいです。
- ⑤私のいとこの住んでいる所は石巻で、かなりの被害を受けました。そして、インドネシアから支援があったそうで、津波のお守り「ツナミカ」を貰ったそうで、私も1つ貰いました。「ツナミカ」はインドネシアの人が手作りで作ったと書いています。お互い復興に近づいていけるように頑張りたいと感じました。
- ⑥インドネシアに行きたいと思った。その理由は、津波が有ったとしても、前向きな方々が沢山いて、生活に余裕がないのにも関わらず、自分の心には余裕がある。私はなにもかもすべてを持っている。なのに、『嬉しい』という心があまりないように思います。悪いことばかり気にしてしまっています。『そんな小さな悪いことを気にしてどうするのですか?』と心に話しかけられたような気がしました。
- ⑦今日富永先生の話聞いて、今年の平岡先生のアチェとはまた違った印象を受けました。

(2) 実践授業 第3回

社会の時間を使わせて頂いての授業である。対象クラスは、平岡静香先生の中学校3年2組。前回の授業で、インドネシアについてはある程度触れることができていたので、今回は『言語』と『支援』という2つのテーマに絞って展開することを目標にした。授業の展開としては、授業開始の際に簡単なインドネシアの挨拶の紹介をした後、前時の復習をし、前回触れられなかったインドネシアの学生が歌った日本語の歌の映像を生徒達に見てもらい、そして支援についての話をするというものである。

スライド1

授業開始の画面。上半分だけ最初に出しておき、何と書いてあるか尋ねる。数秒後に訳を表示し、どの単語がどれに当たっているかを英語と比較しながら簡単に説明して授業に入った。

Aku: 俺 (I) datang: 来る (come)
kembali: 戻る (back) dari: ~から (from)

**Aku datang kembali dari
Indonesia!!**

訳:俺はインドネシアから帰ってきた!!

3月6日(水) 1校時

スライド2

授業が1校時であったこともあり、『折角なのだからインドネシア語で皆で挨拶してみよう!!』と提案し、私の5分ばかりのインドネシア語講座を開始した。教えたのは、『Selamat pagi (スラマツパギ)』と『terima kasih (テリマ カシ)』『terima kasih banyak (テリマカシ バニャ)』である。

実際に言ってみると、どのように返ってくるのかということも簡単に紹介。

- ①『スラマツパギ!』と言うと『パギ〜!』と返ってくることがある。
 - ②『テリマカシー』と言うと『サマサマ〜(どういたしまして)』と返すのだということ。
- 以上の2つについて触れた。

Selamat pagi!!
訳: おはようございます!!

- Selamat … おめでとう
- Pagi … 朝

terima kasih banyak

訳: Thank you.
訳: Thank you very much.

スライド3

前時の復習。インドネシアの基本知識を私自身を交えて確認した。Q6では、ジルバブについて触れた。ここでは平岡先生が実際に教室を回って生徒にジルバブをつけて紹介した。最後に、Q7でもあるように、学校の図書館便りに海外研修を終えての感想を掲載して頂いたので、読んだかどうかを確認した。

復習事項

Q1. 富永が行ってきた国はどこ?	A1. インドネシア
Q2. インドネシアのどこに行ってきた?	A2. バンダ アチエ
Q3. バンダアチエは何島にある?	A3. スマトラ島
Q4. スマトラで2004年に何があった?	A4. スマトラ沖地震
Q5. インドネシアの主な宗教は?	A5. イスラム教
Q6. イスラム女性の被り物の名前は?	A6. ジルバブ
Q7. ちなみに、図書館便りは読んだ?	A7. 読んだ(2004年11月)

スライド4・5

支援について考える。住宅地の写真を提示してみると、生徒からは綺麗で意外だという反応であった。私もこれを受けて、自分自身もそう思ったということ話す。この住宅は、海外の支援を受けてできた住宅街であり、どこの支援なのだろうね?と生徒に問いかけた。暫くしてスライド5を見せると、『中国じゃない〜?』等のこえがあがった。その後で、この住宅街に対して現地住民の足は遠のきがちであるという実情を話した。

この住宅地は標高が高い場所に位置しており、生活にとって欠かすことのできない水源からは距離があるということ。生活物資の調達にしても、交通費がかかり、それが生活費を圧迫してしまう事情が実はあるのである。

前時に見せたエスケープビルディングの写真を再度提示し、支援には色々な形のものがあるが、どのようなものが支援する国、支援される国にとって良い支援と言えるのか考えて欲しいと投げかけた。



最後に生徒達に、どのような支援があったら良いかを簡単に考えてもらった。そして、その支援によって何が改善されるかということも合わせて考えてもらった。

私が考える支援『こんな支援があったらいい』（一部紹介）

- ①たとえ、物や金でなくても、大変な時、つらい時には温かい言葉や勇気の出る言葉など、心がやすらぐ言葉がほしいなと思ったので、温かい言葉を伝えられるような支援があったらいいなと思います。
- ②図書館を建てる。このことにより、本に触れる機会が増え、本を読むことによって世界を知り、広い視野がもてたり、励まされることがあると思うから。物資が少ない中でみんなに支援が伝わりやすくなる。
- ③町の至る所に（電光掲示板みたいに）パソコンらしきものを置いて、アチェと日本の人が気軽に話せるようにしたい。
- ④交換留学のような形で被災地の方を此方へ招き、こちらから被災地へはボランティアが支援に行く。
- ⑤被災地の心のケアをする。
- ⑥現地教師への支援。中学・高校レベルの教育支援。
- ⑦支援先で支援してほしいもののアンケート調査
- ⑧募金をしてお金を送る。



IV 実践の成果

2回授業を行うことができた中学校3年生の感想文をもって成果としたい。

- ①この前の授業をもっと深くした感じでした。アチェ語は難しいですが英語に変えて考えると意外と分かるような気がしました。でも、どういたしまして=サマサマの印象が強すぎて他ののを忘れてしまいました。
- ②アチェの学校で相手の国の人を歓迎する時、相手の国の歌を歌って歓迎するのはすごいなと思いました。日本語も上手くてびっくりです。外国の人と交流を深めるには、自分から積極的に相手の国の事を知ることが大切なんだと思いました。なので、これからは国際的なことを知って視野を広げていきたいと思います。
- ③2回目の授業ということで、更にインドネシアについて深く知ることができました。インドネシアの人々が「自分たちはこんなに日本を知っているんだよ!!」と発信してくれることはとても嬉しいことだと思いました。私達もそれに応えていけないと思います。例の衣装も良かったですよ。(笑) Terima Kasih!
- ④お話を聞き、自分たちの文化だけでなく、自分たちがどれだけ相手の文化を知っているのかを発表することは、大切なことだと思いました。相手の文化を知ることから世界がどんどん広がっていくと思いました。

V 課題

講義形式と言う一方通行の授業展開の実践となった。可能であれば、生徒の意見を汲み取りながら進めるという授業形態を実現させてみたいと考えている。また今回の授業実践に終わらず、継続して自分自身から現在の世界に目を向け続け、生徒に伝えていくことが大切なのだと感じた。中学校3年生からの感想にもやはり昨年の実践が生きていることが表れていると思う。個人ではなく、学校内の先生と協力していくことで、生徒にも国際理解に意識を向ける雰囲気作りを学校内に作り出すことができるのではないかと思っている。

関連する学習指導要領の内容と文言

中学校学指導要領 第1章 総則 第1 教育課程編成の一般方針

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏（い）敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓（ひら）く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。

●出典・参考図書

- ・HP：JICA 東北
- ・旅の指さし会話帳②インドネシア語 情報センター出版局